# デカセギと家族（12）

## ――沖縄に戻った家族・L一家の場合――

稲葉奈々子
樋口　直人

**要約**

本稿では、アルゼンチン日系人であるL一家の沖縄への帰還の経緯とその後の状況を紹介する。L一家の母親は、アルゼンチンで夫と離婚してから生活苦に陥り、先に沖縄に帰還していた父親の呼び寄せで日本に渡った。アルゼンチン生まれの子ども達は、沖縄の小学校に編入して日本語を学校で学びながら大学まで卒業している。アルゼンチンから日本に引き揚げた沖縄県系人の数は多いが、そのうち沖縄に戻った人の多くは資産か人間関係という形で沖縄に何らかのつてがあった。L一家の場合にも、資産はないものの父親や母親の弟という社会関係資本があったがゆえに、沖縄に戻る道を選択している。その意味で、デカセギの経路が制度化される以前の渡日は、南米での敗残者がやむなくとったというよりは、日本とのつながりを維持している者がとりうる行動と考える視点が求められる。

**キーワード：**アルゼンチン、日系人、移住過程、世帯、帰還移民

### 1. 問題の所在

沖縄は、日本でもっとも海外移民を輩出した比率が高い県として知られる。それは戦前だけのことでなく、戦後も米軍統治下で多くの移民が計画移民や呼び寄せ移民として南米へ渡航した。そしてそのうち一定割合は、南米から日本に戻って生活を再構築してきた。移民というと、送り出し側にとっての出移民と受け入れ側にとっての入移民だけが注目されがちであるが、実際には出身地に戻る帰還移民はかなりの数に上る。沖縄の場合にも、出移民が多かった分だけ帰還移民の数も多かったはずだが、そこに光を当てた研究は郷土史も含めてつい最近まで我々のみる限りなかった[(1)]。

我々が沖縄への帰還移民に注目するようになったのは、アルゼンチンから日本へのデカセギ研究がもとになっている[(2)]。アルゼンチン日系人口は、7割を沖縄系が占めるといわれて

『人文コミュニケーション学科論集』11, pp. 105-111.
© 2011 茨城大学人文学部（人文学部紀要）

おり、その存在感や影響力は大きい。デカセギの調査をアルゼンチンと日本で実施するなかで、沖縄に居住したことがある人にも会うようになった。ただし、デカセギ者の大多数は関東と東海地方で働いており、沖縄には親族訪問する程度だった。では、沖縄に戻ってそこで生活を営む人、沖縄に戻ってから大阪や愛知のような都市圏に再移住する人、最初から都市圏に移住する人の間にはどのような違いがあるのか。そうした問いに答えるべく、沖縄調査に着手して聞き取りを重ねてきた。

そうした聞き取りから得られた見通しは、現時点で表のようになる。沖縄の賃金水準は、本土都市部と比較して相当低い。にもかかわらず沖縄に戻るのは、親の資産（特に土地）そしてまたは世話してくれる親族の存在があることによる。親族の存在は、仕事を得るうえで重要な要素であり、土地建物といった資産は所得が低くても生活を可能にする基盤となる。そうした支えがない場合、沖縄に戻るのではなく最初から本土へ移住することとなる。また、親族がいて仕事を得られても資産がない場合には、本土に再移住する要因となる。資産がなければ、沖縄で暮すよりは本土に出たほうが生活水準が向上するからである。

表　沖縄への居住を決める要因

| | | 親族による職紹介 | |
|---|---|---|---|
| | | 無 | 有 |
| 沖縄の資産 | 有 | 沖縄居住 | 沖縄居住 |
| | 無 | 本土居住 | 本土に再移住の可能性も |

逆にいえば、沖縄に戻る人たちは南米で成功できなかったからというよりも、沖縄で生活できたからだとみることもできる。本稿で紹介するL一家の場合、南米で生活できなかったことが日本への帰還を決断させる要因となっているが、沖縄にいた父親の存在こそが重要だといえる。

## 2. L一家について

L一家に対しては、2010年11月にアルゼンチン関連のイベントで知己を得て、聞き取りを了承してもらった。それから2週間後に沖縄にある一家の自宅を訪問し、聞き取りした。さらに2011年3月にも再度訪問し、重ねて聞き取りを行った。

L一家は、沖縄生まれだが5歳のときに伯父の呼び寄せにより家族でアルゼンチンに移住した母親と、本土出身の父親という一世の夫婦から始まった。母親の父親とキョウダイのうち3人は沖縄に戻ったが、残る1人は今でもアルゼンチンに住んでいる。夫婦は長男と長女をもうけて生活していたが、長女が就学前に離婚している。後述するように、この離婚がL一

家の運命を決定することとなった。

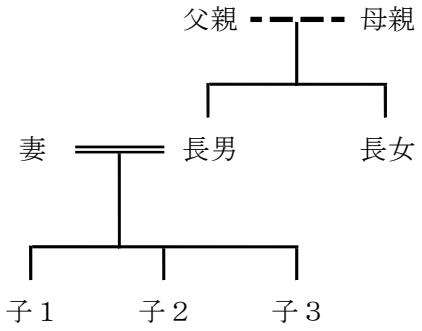


図　L一家の系図

### 3. アルゼンチンからの引き揚げ

母親がアルゼンチンに渡ったのは1952年と、戦後移民のなかでも早い部類に入る。母親の家族を呼び寄せた伯父はアルゼンチンでの成功者だったが、母親の父親はアルゼンチンでうまくやっていけなかった。つまり暮らし向きに余裕がなく、4人キョウダイの長女だった母親はアルゼンチンで中学校を中退し、家で弟達の面倒をみていた。母親の母親は1970年代前半にアルゼンチンで亡くなった。それを機に、母親の両親はアルゼンチンでの生活に見切りをつけて、弟2人を連れて先に沖縄に戻っていた [(3)]。母親と妹は、結婚して自分の家庭を持っていたため、アルゼンチンに残った。

ところが、夫の自動車修理工場も経営がうまくいかず、家族仲もうまくいかなくなって2人は離婚した。離婚してからの母親は、子ども2人を抱えて住む家もなく、友人の家に住まわせてもらうような状況だった。そうした困窮状況に対して、沖縄に戻っていた母親の父親が手を差し伸べ、1982年に3人分の旅費を出して沖縄に呼び戻したのであった。

母親の父親の家は、比較的裕福で元々は土地持ちでもあったが、アルゼンチンに移民する際にすべて売却して行ったため、日本に戻ったときにあったのは墓地くらいだった [(4)]。資産がないなかで生活を始めたため、母親の父親は自らの伯父に少し土地を譲ってもらい、そこに自分の家を建てた。仕事も、息子2人とともに地元では大きなブロック製造工場で働くことができたが、結果的に南米行きにより資産を失いゼロからの出発となった。それに加えて、母親の父親は肺ガンを患ってその治療のために帰国後に建てた家も手放してしまった。母親の弟のうち1人は、その後アルゼンチンに戻っており、沖縄での生活がうまくいかなかったことを示唆している。このように、アルゼンチンだけでなく沖縄に戻ってからも不遇の日々が続いた母親の父親だが、親族の援助があったからこそ生まれ故郷の村に戻ったといえる。

母親は沖縄に戻っても家族に頼ることはできなかったが、仕事は紹介してもらえた。そも

そも、幼少時にアルゼンチンに渡ったため日本語がまったくできなかった母親にとって、自らの父親がいなければ沖縄に住むことを考えることもなかっただろう。母親が紹介してもらったのは解体業での後片付けの仕事であり、日本語は生活のなかで少しずつ覚えていったため、今でも意を尽くせないことが多い。同じ仕事を25年間続け、60歳になったのを機に仕事をやめている。「私の話は暗いよ」と自ら言うように、母親もアルゼンチンと沖縄の双方で余裕のある生活をしていたとはいえない。だが、郷里の村から出ることなく暮していけたのも事実であり、待遇がいいとはいえないが25年間続いた仕事を紹介されたことは大きな要素と考えられる。

## 4. 子どもの進学と就職

### (1) 大学進学

学齢期になって日本に来た長男と長女は、学年を下げて編入し、2年間は特殊学級に在籍して日本語を教わった[(5)]。スペイン語を完全に忘れることはなかったものの、日本語のほうが得意になっていった。こうした文化変容は、逆説的に長男をして後にアルゼンチンに向かわしめる要素となる。

長男と長女が他の同じ境遇にあった子どもと異なるのは、2人とも大学に進学したことである。母親の収入では沖縄での生活を支えるのがやっとであったため、2人は進学のため本土に渡って新聞奨学生となった。長男は工学部で4年、長女は1年の浪人を経てスペイン語学科に合格したため5年間、新聞奨学生として働きながら大学を卒業している。さらに長男は大学院に半年間通って中退し、長女はスペインに1年間留学を果たした。長男はそれから沖縄のホテルに就職し、長女はスペイン語とは何ら関係ない仕事についたという点で、専門分野が生かされたわけではないが、大学卒業後も勉学を続けたわけである。しかも親からの援助は皆無だったわけで、向学心が強い兄妹だからこそ学業が続いたのだといえるだろう。

### (2) 就職後のアルゼンチン渡航

妹である長女は、それから本土で就職して今に至っているが、兄である長男は違った。彼はホテルのアルバイトから始まり、契約社員、正社員となったが、働き始めて4年たった2000年、沖縄サミットが終わって仕事が一段落したところで仕事をやめている。その年には沖縄の女性と結婚しており、2人でアルゼンチンで生活するためであった。最初は長男が1人でアルゼンチンの叔母（母親の妹）の家に身を寄せ、仕事とアパートを確保したところで妻も渡亜した。

これは、長男の言葉を借りれば「アイデンティティ探し」のアルゼンチン生活であり、スペイン語と失われたアルゼンチンでの生活を取り戻すための旅としての性格を持つ。アルゼ

ンチンへの渡航に先立って、長男は南米生まれのスペイン語ネイティブに個人レッスンを受け、忘れかけていたスペイン語を習得していった。そうした準備を経て、アルゼンチンの日本食レストランで働きながらそこでの生活を思い出していく。

妻はスペイン語ができないため、働かずに専業主婦をしていた。当初からアルゼンチンで生活するのは1年半と約束しており、移住ではないから言葉も覚えていない。アルゼンチンにいる間に妻が妊娠し、日本語が通じる環境で出産したいと思ったこと、そもそも1年半の滞在期限になることから、予定通り沖縄に戻っている。それから長男夫婦は母親と共に沖縄で生活し、2007年からは共稼ぎの夫婦が働いている間の3人の子どもの世話を母親がみて生活している。

## 5. 結語にかえて

L一家の場合、沖縄に戻ってからの条件が恵まれていたとはいえない。離婚していたため母親が1人で稼ぎながら子どもを育てねばならなかった。しかも母親は、幼少時に移民したため日本に戻ったときにはほとんど日本語ができなかった。頼りの親族である父親も、生活に余裕があるわけではなく資産があるわけでもなかったため、文字通り沖縄で手探りの生活をするしかなかったわけである。しかし、にもかかわらず沖縄に戻ったのは、父親がいたからにほかならない。それは他の弟達も同様であり、必ずしも実入りの良い仕事でなくても家族の紹介で生計の途を得たのも間違いない。

デカセギを斡旋する経路ができあがった1980年代後半以降は、パックツアーに申し込むのと同じ感覚で日本での仕事を探すこともできるようになった。だがそれ以前は、L一家がそうであったように日本での生活をあらかじめ保障する社会関係資本がなければ、日本への帰還・デカセギは難しかったと思われる。これまでの通説では、筆者を含めてデカセギブーム以前に渡日することは、不名誉な撤退としての性格を持つがゆえに不可視のものであると理解されてきた（梶田・丹野・樋口 2005）。つまり、南米側での剥奪が日本への渡航の要因であるという解釈であり、これは日本への渡航を可能にする条件を考慮していない。

世界的な移民研究では、剥奪よりも移住に必要な資源（金銭、情報、社会関係）のほうが重要という見解が通説であるにもかかわらず、デカセギ＝敗残者という言説を無批判に受け入れていたわけである。冒頭で示した表は、日本国内でも沖縄を選択する条件として、資産や社会関係を挙げたもので、L一家の場合にもこれは当てはまる。そしてこれはL一家をはじめとする沖縄への帰還移民のみならず、デカセギブーム以前の渡日を分析するに際しても該当するものと思われる。そう考えたとき、初期の日本へのデカセギ者は南米から逃げていった者としてではなく、日本とのつてを持ち生活を可能にしていったとみなしたほうがよい。

他方で長男は、アルゼンチンで生まれた際に日本大使館に出生届を出していないため、ア

ルゼンチン国籍である。それから30年近く日本に住みながらも、日本国籍を取得していないし、取得するつもりもないという。そうした長男にとって、青年期になってからのアルゼンチン生活は、自らのスタンスを見出すために必要なものだったといえる。ただし、妹はアルゼンチンで生活したわけではなく、妹に対しては聞き取りを行っていないため、それが個別的な要素に基づくものか否かはわからない。

ただし、長男が2000年にアルゼンチンに行く直前に母親も3ヶ月間アルゼンチンの妹の家に遊びに行っている。沖縄生まれだがアルゼンチンで育った母親にとって故郷はアルゼンチンであり、言葉の面からも日本は異郷という意識が強いだろう。日本でも工場のあるところに住むデカセギ者とは異なり、「生まれ故郷」の沖縄に戻って20年を経過したにもかかわらず、長男と母親は故郷探しのためにアルゼンチンで生活した。家族の中にこうした意識が共有されていたわけであり、それは日本に定住するデカセギ者が将来的に経験するであろうことを暗示している。

## 【注】

(1) 近年出されたものとして、水谷（2010）がある。沖縄以外に帰還した人たちもかなりの数にのぼると思われるが、デカセギに関連する研究が出るまで同様に研究されてこなかった。
(2) デカセギに関する成果としては、樋口（2005, 2007, 2008, 2009a, 2009b, 2010a, 2010b）、樋口・稲葉（2008a, 2008b, 2009a, 2009b, 2009c, 2010a, 2010b, 2010c, 2010d, 2011）、稲葉・樋口（2008, 2009, 2010a, 2010b, 2010c）がある。
(3) 弟2人は第三子、第四子でありアルゼンチンで生まれている。その後、兄のほうである長男は沖縄からアルゼンチンに再度戻り、アルゼンチンで暮している。
(4) 沖縄に多い亀甲墓は、他の地域と異なり一定の敷地が必要であるため、「土地」を所有するなかに含められている。
(5) これは、南米から帰還する家族が多い沖縄では普通に行われていたことで、L兄妹以外にもう1人同じような境遇の児童がいたという。その意味で、「ニューカマー」流入が始まる以前から沖縄では類似した経験を積み重ねていたといえる。

## 文献

樋口直人，2005，「アルゼンチンの日系クリーニング店とデカセギ」『Migrant’sネット』83号.
———，2007，「新宿駅西口の移住労働者」『Migrant’sネット』105号.
———，2008，「ミクシィでつながる南米日系の若者たち ――狭間におかれた若者たちの可能性」『Migrant’sネット』115号.
———，2009a，「日系人の大量失業――『もうひとつの派遣切り』の教訓」『DEAR News』138号.
———，2009b，「南米日系人のデカセギと子どもの教育――地球の両側から考える」『Migrant’sネット』124号.
———，2010a，「滞日経験を生かす外国人労働者」『東アジアへの視点』21巻1号.

———，2010b,「経済危機と在日日系南米人——何が大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622号.
———・稲葉奈々子，2008a,「デカセギと家族 (1)——日本就労の意図せざる結果・A家の場合」『徳島大学社会科学研究』21号.
———，2008b,「デカセギと家族 (3)——完全な定住と事実上の定住の間・C家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』41号.
———，2009a,「デカセギと家族 (4)——日本で育った子どもが帰ってから・D一家の場合」『徳島大学社会科学研究』22号.
———，2009b,「デカセギと家族 (5)——一家離散と再結合の過程・E一家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』42号.
———，2009c,「アルゼンチンからデカセギ研究・序説——デカセギの概要と仮説提示の試み」『茨城大学地域総合研究所年報』42号.
———，2010a,「デカセギと家族 (8)——兄弟の成功物語・H一家の場合」『徳島大学社会科学研究』23号.
———，2010b,「デカセギと家族 (9)——ライフコース上のそれぞれの帰結・I一家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』43号.
———，2010c,「移民自営業者によるニッチ形成と産業構造——横浜市鶴見区における南米系電設業者の進出を事例として」『村田学術振興財団2010年報告書』村田学術振興財団.
———，2010d,「移民自営業者によるニッチ形成と産業構造——横浜市鶴見区における南米系電設業者の進出を事例として」『村田学術振興財団2010年報告書』村田学術振興財団.
———，2011,「デカセギと家族 (11)——日本で育った子どもの日本への帰還・K一家の場合」『徳島大学社会科学研究』24号.
稲葉奈々子・樋口直人，2008,「デカセギと家族 (2)——農園維持の世帯戦略・B家の場合」『茨城大学人文学部紀要（社会科学科論集）』46号.
———，2009,「デカセギと家族 (6)——ミドルクラスのハビトゥスと周辺的労働力という現実の間・F一家の場合」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』7号.
———，2010a,「デカセギと家族(7)——独立への2つの道・G一家の場合」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』8号.
———，2010b,「デカセギと家族 (10)——ポスト花卉栽培の生業をめぐる苦悩・J一家の場合」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』9号.
———，2010c,『日系人労働者は非正規就労からいかにして脱出できるのか——その条件と帰結に関する研究』全労済協会委託研究報告書.
梶田孝道・丹野清人・樋口直人，2005,『顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会.
水谷史男，2010,「沖縄南米移民の動機と背景——沖縄本島本部町における生活史的覚書」『研究所年報』40号.

（付記）本稿のもととなった調査に際しては科学研究費を使用している。2回目の訪問の際に手作りのニョッキをご馳走してくれたL一家の皆さんの厚情と併せて、記して感謝したい。